

延期劇が映したひずみ

東京五輪・パラリンピックの延期が決まった。この間の「延期劇」には、疑問に感じることが多い。幻の 1988 年名古屋五輪から、五輪「騒動」に関心をもってきたので、朝日新聞 3 月 28 日朝刊「耕論」に注目した。ライターの武田砂鉄さん発言を抜粋して紹介したい。



五輪の延期発表で、リセットボタンが押され、なんとなく「一区切り」の雰囲気が出ています。なぜ中止ではなく、延期なのか。「1 年」の根拠は何なのか。こうした疑問に明確な説明があったわけでもないのに、です。延期は安倍首相が IOC に提案したことになっていますが、あらかじめ報じられていたように、カナダや豪州が選手を派遣できないと表明していた。安倍首相は少し前まで「完全な形で」開催する、と言っていました。世論も「まあ無理だろう」と思っていた。ただこの「なし崩し」は新型コロナウイルスの感染拡大で始まったわけではない。東日本大震災後の 2013 年の段階で、復興五輪として五輪を招致するため「福島はアンダーコントロール」と語った。汚染水問題があるのは誰もが知っていたのに、です。都市型のコンパクトな五輪をめざし、コスト削減も重視していたのに結局、施設の建設費は想定以上に膨らんでいます。招致活動で JOC の竹田恒和元会長の贈賄疑惑もうやむやなまま。こういうプロセスまで「一区切り」にしてはいけません。「やる」ことは決まったことなのだから、「成功」させるしかない。繰り返し訴える政治家の「強い言葉」で、色々な問題がうやむやになってきた。ただ、「強い言葉」といっても、よく考えると意味が分からない言葉ばかり。「延期」決定直後の安倍首相の記者団への言葉が典型的です。「人類が新型コロナウイルス感染症に打ち勝った証しとして、完全な形で東京オリンピック・パラリンピックを開催する」。ウィルスに打ち勝つ？ 意味、分かりますか。人間社会はこれまでもウィルスと共存してきたわけで、「打ち勝つ」などと改めて意気込まれても何のことやら。しかも、主語はなんと「人類」。話が大きすぎるのに具体策は薄い。

政治家だけではありません。1 週間ほど前、JOC の理事の一人が今夏の五輪開催を延期すべきだと主張したら、山下泰裕会長は「みんなで力を尽くしていこうというときに、そういう発言をするのは極めて残念」と批判しました。予定通り開催すべき理由を説明するのではなく、持ち出れたのは「みんなの気持ち」でした。メディアのチェック機能も働いてこなかった。「暑さ」が懸念された東京でのマラソンが札幌開催に変更されたのは、「延期」と同様、海外から懸念の声が上がったからでした。本来は国内メディアが問題視すべきことのはずが、精神論を紹介する「提灯記事」も目立った。朝日新聞も含め各社が五輪のスポンサーだからこうなったんでしょうか。

延期より「中止」が経済的な損失が少ないのではないか、「復興五輪」ならこのタイミングで中止してその分のお金を復興に回す。そう考えてみてもいいはずなのに「どうせやるんだから」となる。

(2020 年 4 月 1 日)